

「“ぜんそく”」 と私



子どものころ、弟や親せきの子に「咳をしだすと止まらなくなる」「ぜんそく」という病気に悩まされた。

別に私が“喘息”になったというわけではない。

私の母が学校の先生に弟や親せきの子が「咳をしだすと止まらなくなる」んですよ、と世間話をし「それなら、毎朝30分程度ランニングさせてみたらどうですか」とアドバイスされて母からえらい目にあわされることになるのだ。

母は毎晩「ベットタイムストーリー」を読んでもくれる。

母の愛に包まれて優しい母の声を聴きながら、とても幸せな気持ちで眠りにつく。

問題は次の日の朝だ。目覚ましが鳴り、鳴り終わると「くるみ割り人形」がオルゴールで流れる。「ベット」の中でぐずぐずと幸せな気分浸っていると、優しい母の声で「起きなさい」と聞こえてくる。返事をしないで寝たふりを楽しんでいると、少しトゲを含んだ母の声で「起きなさい」といったわよ。

私もこの辺で起きればよいものを、返事をしないで幸せな「まどろみの世界」に入り込む。

そこで母からの最後通牒。「私が優しく言っているうちに起きなさい！」幸せな気分は一瞬にして吹き飛び覚醒する。

それから・・・が恐怖

条件反射で朝の6時前に飛び起きて6時ジャストに近くの川の土手に運ばれる。「走れ!」と言われ走り出す。

土手は左右をススキが生い茂り、まるでススキの「塀」と「塀」の間に挟まれた一本道のようなのだ。

走り始めると、15メートル程度後ろを母が「乗用セダン」で追いかけてくる。

走った人なら分かると思うが、恐怖感には半端ない。なにせ走り出したら止まれないのだ。転んだり、止まったりしたら、母の車にぶつかってしまう。右や左にススキの塀があるので、とっさに左右に逃げることもできない。

アメリカ土産の腕時計

父がアメリカ土産に文字盤の大きな「リストウォッチ」を買ってきてくれた。

目覚まし付きの腕時計は便利で走り出す時に30分後に設定すると当たり前だが、30分後にちゃんと鳴って教えてくれる。

30分後に走るのをやめてよい、と思うとホッとする。

それなのに、母と父はマラソン大会を目指してもっと走れ、という。

中学1年生になったら“ぜんそく”の気は全くなかった。

陸上部のカトー君がアップダウンのあるコースを毎日走っている。

一人で走るのが嫌なのだろう、時々「一緒に走りませんか」と誘ってくる。

私は陸上部員でもないしマラソンには全然興味がない。

しかし、せっかくだからと「爽やかカトー君」に付き合っただけ走ることもあった。

それまで他人と一緒に走ったことはなかった。だから、自分の力は全然わからない。

中学校の1年～3学年までの全学年でのマラソン大会があった

秋から初冬にかけての時期で、カトー君から「一緒に走りませんか」のお誘い

がほぼ毎日かかる。自然にお付き合いし一緒に走る機会が増える。大会直前など毎日一緒に走っていた。

大会当日、カトー君を含めて陸上部のみなさんが最前列に並ぶ、私はあえて中段につけた。

号砲一発、全員が走り出す。カトー君たち陸上部の面々は先行勢である。コースはカトー君の走っていたアップダウンのあるコースだ。

私はここで前を走っているランナーと駆け引きする楽しみを覚えてしまった。下り坂で距離を稼ぎ、上り坂でじりじり忍耐強く追い上げるのだ。すると強敵がどんどん潰れてゆく。

目の前にターゲットがいるということは駆け引きの醍醐味。私の順位がどんどん上がっていく。結果はカトー君が1着、私が2着だった。

“ぜんそく”を克服するために母にあおられて走った30分。いろんなことがわかった。

